

自立した地域社会に向けて
～ 顔の見える産業を考える ～

松下生活研究所 代表 松下 修
熊本大学大学院社会文化科学研究科
公共社会政策学専攻
熊本大学非常勤講師 鹿児島大学非常勤講師

～ 顔の見える産業を考える ～

- 考えさせられる農山村の現状
- 農山村を犠牲にして成り立つ都市部
- 1960年代からの農山村社会の変貌
- 農林産物の商品化
- 「食と農」
- 「家と木材」
- 地域の自立的発展には
- 対人関係と経済
- 「顔の見える産業」で地域の自立的発展

考えさせられる農山村の現状

- 厳しい農山村
 - 後継者、担い手不足
 - 家族世帯の極小化
 - 低所得
-
- 自立的発展はありえるのだろうか？

農山村を犠牲にして成り立つ都市部

- 1960年代からの農山村社会の変貌
- コストを支払わずに資源を搾取
- 環境、自然、農業、林業の疲弊
- 「和食の輸入化」、「カレーライスの自給度」 「住宅は世界の木造展示場」など農林産物の商品化、流通化、安定化が齎した

地域振興策による 1960年代からの農山村社会の変貌

- 1960年代地域振興の全国プラン、大規模産業拠点の全国的分散化。農山村から工業地帯へ労働力を提供。全国の都市化。
- 1970年代新全国総合開発計画。工場や企業誘致、土地提供による生活基盤。
- 1980年代リゾート法の成立。巨大開発。
- 1990年代バブル経済崩壊後の田園リゾート、都市と農山村の交流、ツーリズム。

農山村社会の変貌

- 急激な都市移動による人口減少と世帯減少
↓
例) 熊本県山都町 S25年45,000人 H18年20,103人
- 農林業への依存の構造的変化
- 1960年頃まで日本人の8割農山村に住み、国民の75%が農作業に従事し、半自給的生活。
- 非農林業的職業の増加や購買などの生活欲求充足の都市への依存に変化。
- 消費主義に対応する安価な農林産物生産

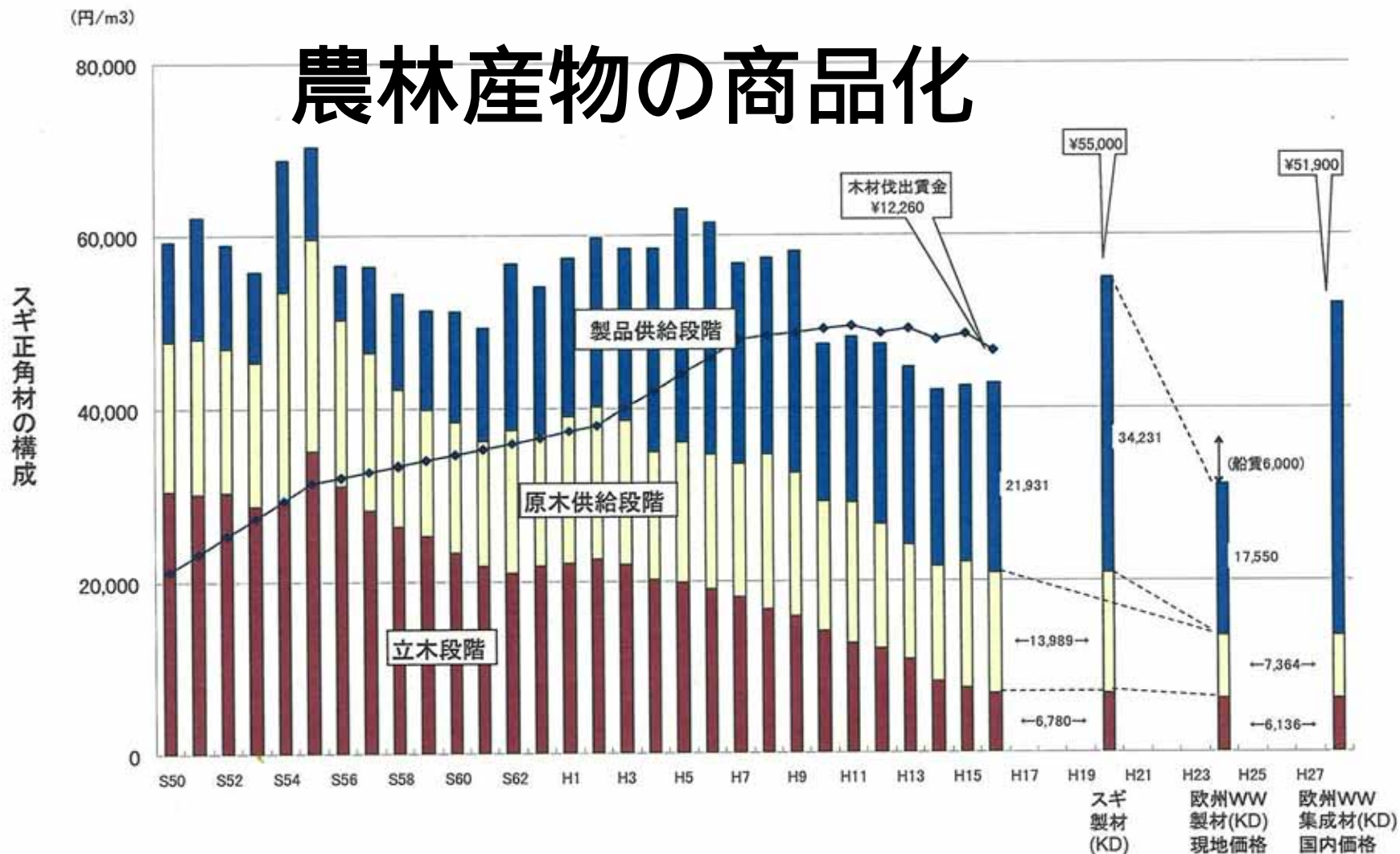
農産物と木材

- 自給率の低下
- 農山村に関わるコストを支払ってこなかった。
- 安い輸入品に頼った暮らし方。
- 商品化された農山村の資源

(4) 木材価格の推移と構成

スギ正角材1m³当たり価格の構成(未定稿)

農林産物の商品化



資料: 「山林素地及び山元立木価格調」(日本不動産研究所)、「木材価格」(農林水産省)、「林業労働者職種別賃金調査」(厚生労働省)

注: 立木段階は、スギの山元立木価格、原木供給段階は、スギ中丸太価格と山元立木価格の差額とした。

製品供給段階は、スギ正角材価格とスギ中丸太価格の差額とした。

なお、山元立木価格とスギ中丸太価格は、歩止り65%として製品1m³を製造するのに必要な量(約1.54m³)の価格で積算している。

欧州現地価格は、1ユーロ=135円で換算。

農林産物の商品化

日本の1870年代からの人口爆発に対応した
戦後の流通：定量出荷、安定 → 輸入化

中央卸売市場

生産者 消費者	農産物	農家	生産・農業
	食糧	行政	エネルギー分野
	商品	流通	利益
	食品	消費者	価格・利便性 安全性

資料：徳野貞夫ゼミから

「食と農」

資料: 徳野貞夫 「農村の幸せ都会の幸せ」

朝食 和食の輸入化
お味噌汁、油揚げ
豆腐、醤油 大豆の加工
大豆の自給率(5%)
塩鮭(カナダ産)
鯖(ノルウエー産)
かまぼこ(すけそう鱈9割輸入)
卵(国内だけど鶏の餌は輸入)

天ぷらうどん 和食の輸入化

小麦粉	輸入
天ぷら粉	輸入
海老	インドネシア
つゆ	原料の大豆輸入

カレーライス 洋食

自給度64%ほど

米 自給

肉 50%

じゃがいも 自給

人参 自給

たまねぎ 自給

家は世界の木材展示場

柱：スギ-日・茨城県

梁：米松-ワシントン州

下地：合板-ロシア

ハバロスク州

筋交：米松-加BC州

間柱：北洋赤松

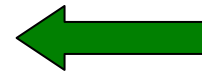
露-イルクーツク州

土台：ベイヒバ

-米・アラスカ州

日本の木造住宅

「家と木材」



家は世界の木材展示場

木材自給率20%の日本

	国産材	外材	集成材 (主に外材)
柱材:	17.1	0.6	80.9
横架材:	2.0	25.8	64.6
土台:	17.1	14.4	66.5
大引:	7.6	28.4	61.6

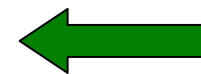
(九州森林管理局 木造住宅建築における主要部材の使用樹種)

木の家を望む人は8割
なのに、4割しか木造住宅は
建っていない。

出典) 内閣総理大臣官房広報室「森林とみどりに関する世論調査」

出典) 建設省「住宅着工統計」1997年

「家と木材」



地域の自立的発展には

- 日本の農山漁村における資源(農業、林業、漁業、自然、環境)にコストを払った暮らし方が必要。
- 農山漁村の資源は、本来、市場原理には馴染まない。(生命に関わる)
- 地域を支える産業を循環させる関係性を取り戻す必要。
- それには、対人関係と経済発展のありかたから見直さなければならない。

対人関係と経済

- 対人関係と経済発展～フィンランドの経済発展の基礎～ソーシャル・キャピタルの差
- キューバの復興～ソーシャル・キャピタル
- マレニー町に見る経済発展～マイクロビジネス(コミュニティ・ビジネス)
- 地域内循環を考える

GDPの成長率

GDPの成長率 (1999-2000年)

1位フィンランド

5.7%

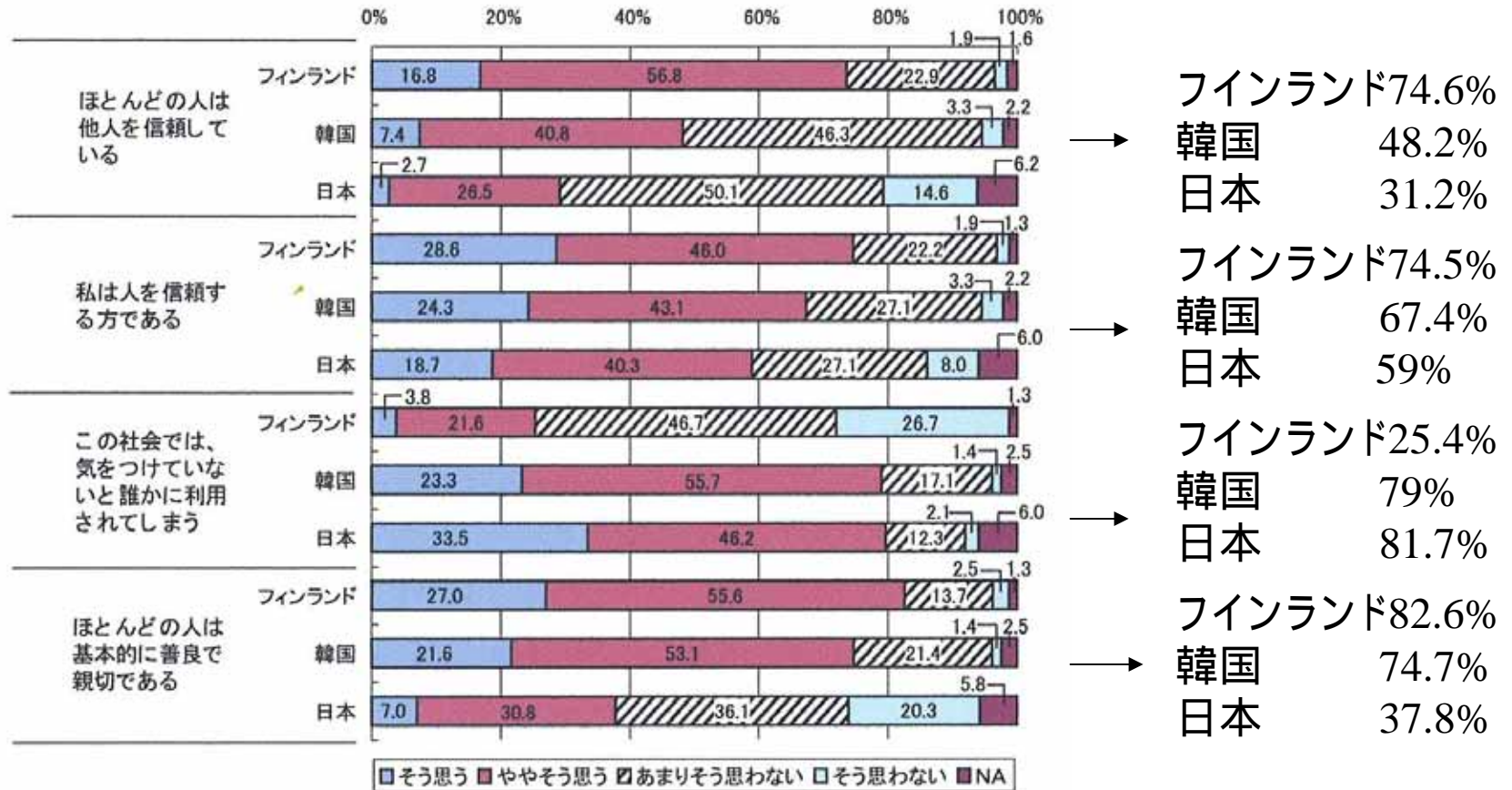
11位 日本

1.5%

ソーシャルキャピタルの差
(神野直彦 東京大学教授)

対人信頼感の比較

対人信頼感の比較（日本・韓国・フィンランド学生比較調査）



出典：木村忠正 「間メディア性」 本格化の年 (『NIRA政策研究』 vol.18no.12, p31, 2005年12月)

国家非常事態宣言を脱した キューバの復興

- キューバはソ連邦の崩壊により1991年未曾有の食糧危機
- 輸入額は一挙に80%も落ち込む
- 社会主義圏に於ける分業システムの崩壊
- 比較生産費原理に頼った農林産物の危険
- 草の根レベル(労働者、農民、学生など)でのソーシャル・キャピタル(信頼・規範・ネットワーク)により復興

マレニー町の発展

- オーストラリア、クイーンズランド州南東部、サンシャインコーストの山沿いにあるマレニー町というのがある。この小さな町が「コープ首都」として世界的に注目されている。
- 1970年当時、マレニーは、小さな街で人口わずか800人程であった。ほとんどの店は閉鎖され、街を歩く人々や農家の人は、落胆したような精気のない町であったという。

マレニー町の発展

- 現在この町は活気に満ち人口5000人の町になっている。その恩恵を3つ列挙すると、
＜経済的な恩恵＞については、約20件のフルタイムの仕事、90件のパートタイムの仕事が約5,000人の地区住民の直接的雇用に繋がっている。間接的雇用を入れると、200件以上の雇用が増えた。

マレニー町の発展

- < 社会的・文化的な恩恵 > は、コープ内のメンバーのトレーニングにより、関与した人々を大きく成長させた。信用、市民の責務、ネットワークが際立って発展している。住民の自立意識が向上し、レッツ(地域通貨)導入により、物資やサービスを通常の雇用制度に頼らずに受給できるようになった。コミュニティとして、新・旧移住者、また若者と高齢者を分けていた壁が薄くなり、住民の社会的な繋がりが強くなった。

マレニー町の発展

- < 環境的な恩恵 > コミュニティの中で、地球に負荷のない生活に心がけるようになり、ゴミ処理、代替エネルギー、エコ商品など環境に考慮した暮らしが広がった。

マレニー町の発展

- リードという地域経済・企業発展の支援を活動するコープを立ち上げた。クレジット・ユニオンとリードのパートナーシップにより、通常、初めの1～3年で潰れてしまうケースの多い小規模経営を始めた人々のリスクを大幅に減らすことができた。現在、クレジット・ユニオンは1,500万ドルを超える資金を持ち、銀行のビルを所有し、6,000人近くのメンバーを抱え、街に230種の雇用を作り出した110件の新ビジネスを産むに至っている。

マレニー町に見る発展

ソーシャル・キャピタル(人間関係性資本)の技術活用。

自然発生的に誕生したコープなどの多くのマイクロ・ビジネス。経済活性化のコープ、市民銀行(クレジットユニオン)、社会活性化のコープ~コミュニティ・ラジオ、中間支援コープのリード(マイクロビジネスのアドバイスなど)

地域通貨レッツの導入

地域活性化をするには小さく始めた

持続可能な、個人や地域社会のライフスタイルの構築

域内循環を考える

資料参考: ancientfutures][01545]

地域内の経済循環 鎌田

地域に入ったお金を最大限に活かす循環経済

**A町: お金が地域で使われたときに、
そのお金の8割が地域に残る**

**B町: お金が地域で使われたときに、
そのお金の2割が地域に残る**

**C町: お金が地域で使われたときに、
そのお金がすべて地域外に出る**

仮に1万円がA町に入った場合、
8000円が残ります。
8000円がまた使われて、今度は6400円
が残る。
6400円がまた使われて、5120円が残る
・・・という風に循環していくと、循環する
額の総額は5万円になります。
1万円のお金が5万円の価値になる
ということですね。

これがB町の場合だと、1万円は2000円になり、2000円が400円になり・・・循環するお金の総額は12500円だけです。
4倍も違ってしまおうんですね！
C町の場合は、計算するまでもなく、地域内で全く循環しないので、総額も1万円だけです。A町との違いは5倍となります。

さらに違いが出るのは、循環する回数です。
A町の場合は、1万円が1円以下になるまで、
42回も地域内を循環します。
つまり地域のいろいろな人、組織が潤うこと
になります。
B町の場合は、たった6回。
つまり、7倍も違ってしまいます！
C町の場合は、たった1回。
A町との違いは42倍です。

つまり、地域にお金が残る仕組みを作れば、地域経済の総量が増えるだけでなく、それ以上の効果として、経済的利益を被る人や組織の数が飛躍的に増えるということになります。しかもその効果は時間的にも長く続きます。経済面だけの効果だけでなく、人と人が繋がらう社会効果、物理的移動距離が少なくなる環境・エネルギー効果、地域のもの・ことであることの心理的安心効果などの良い副産物もあることでしょう。

自立的地域の発展

地域に即した人間関係を築くことから始めなければならない。

「現在世界の発展の第1位はフィンランド、日本は11位。それはソーシャル・キャピタルの差である」と考えられる。

地域に根ざした活動

地域の資源を生かした暮らしを「地域に根ざした活動」によって構築しなければならない。

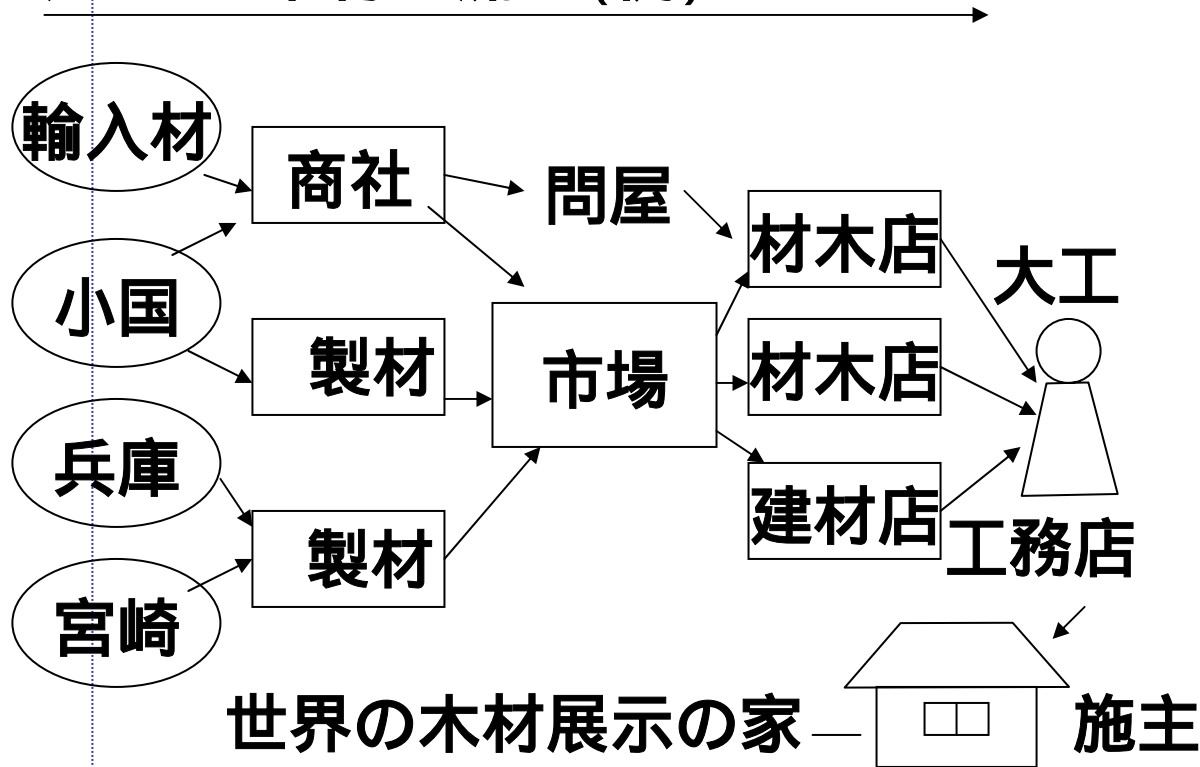
その為には「顔の見える域内循環型の産業」が必要である。

顔の見える木材流通と家づくりの構築

顔の见えない家づくり

現在の流通システム

今までの木材の流れ(例)

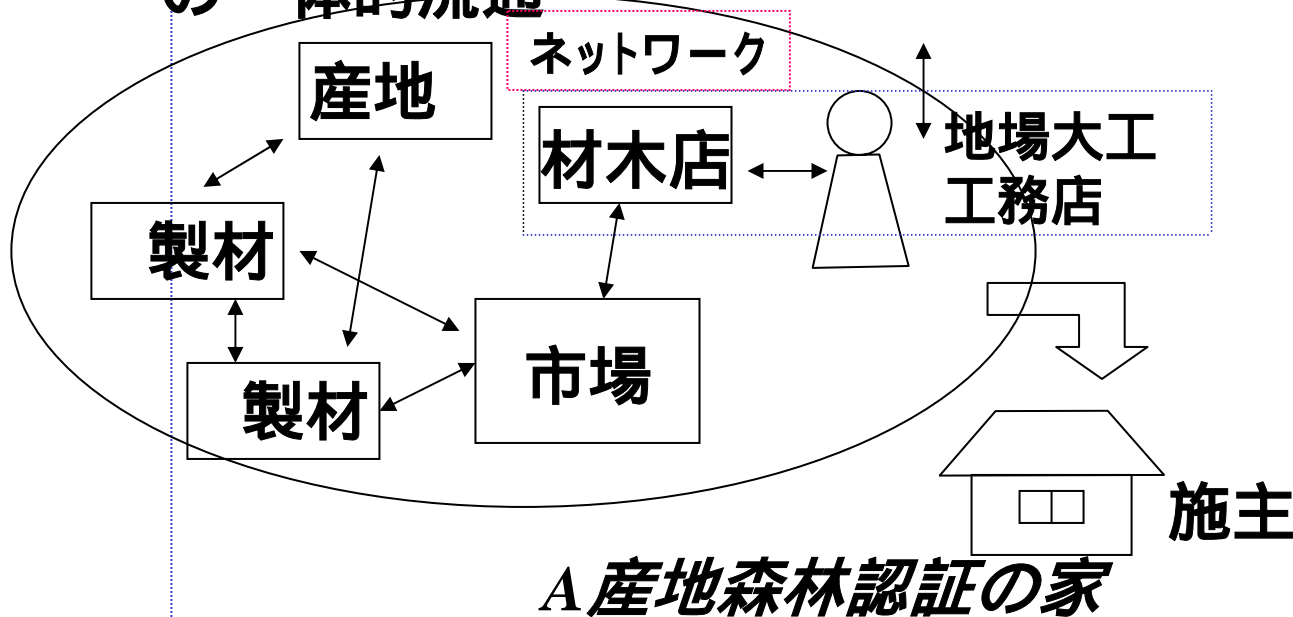


顔の見える木材流通と家づくりの構築

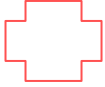
森林認証流通システム

顔の見える認証の家づくり

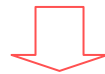
これからの木材の流れ(例)
関係者が経営資源と役割を活かし市場を
ストックヤードとして機能する地域材認証
の一体的流通



認証の家づくり

有機的に結ばれた流通システム  森林認証木材を生かす家づくり

木材は温暖化の原因といわれるCO₂を吸収し、
長期間ストックできる再生可能な資源。しかし、日本を含め
世界で使用されている木材の多くは、環境に配慮せず違法に伐採されたもの。
そのため健全な森林と正しく管理
された森からくる木材を認証し、加工製品された木材が適切な流通を経て
消費者へ渡る仕組みが必要となる。



顔の見える流通と家づくりの構築 (諸塚村・小国町・屋久島)

これからの木材・住宅市場の展望

• 流通再編の時代

-新たな流通編成と新生産システムの展開

課題

- 1、外国集成材から国産集成材へ- 自給率20%の国産材からの脱却、国際競争商品木材、国産材の低コスト化を森林整備や生産・流通・加工の新たな新生産システムで。
- 2、在来型の工場は、付加価値をつけ、山と結びついた家づくりを。(山の動きと連動した家づくり)

参考:九州森林管理局 「森林・林業・木材林業の課題と今後の方向」

これからの木材・住宅市場の展望

-国の木材生産・流通政策-

国産木材の供給「抜本改革の必要」

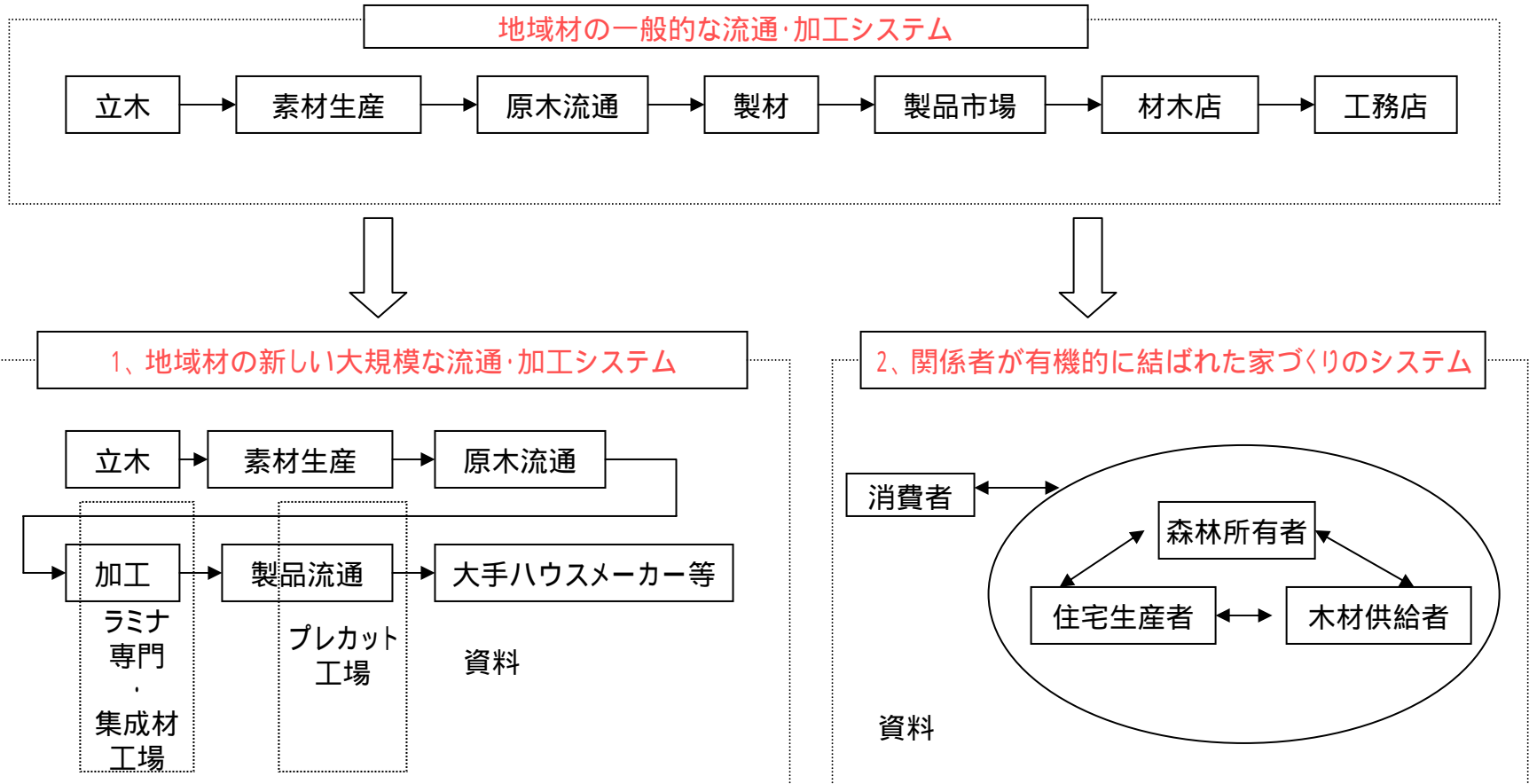
「森林・林業の再生に関するプロジェクトチーム」

内閣官房副長官と農水など関係省庁の副大臣のチーム

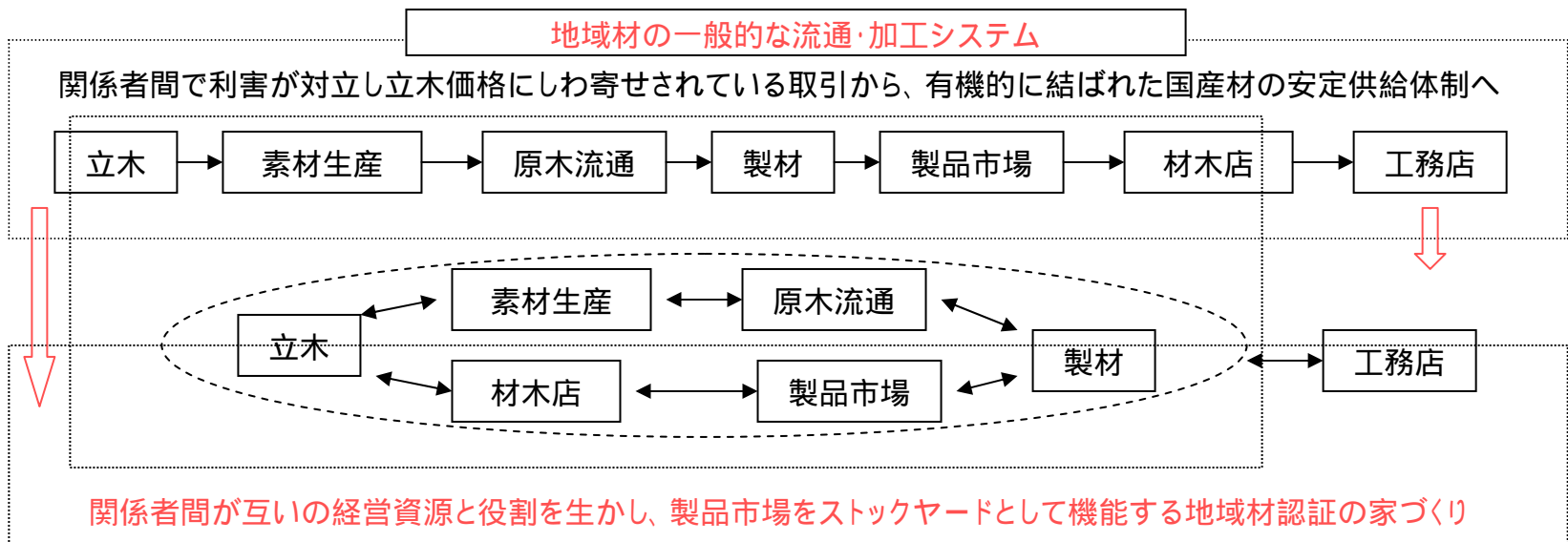
熊本日日新聞2006年6月1日号

2006年6月1日国産材の供給を促進するため、生産から流通までの仕組みを抜本的に改革すべきという提言をまとめる。日本の林業は、小規模経営が多い上、流通経路が複雑なため、低コストで大量供給を求める住宅メーカーのニーズに応じ切れていないのが現状。提言は1) 森林所有者をまとめて経営を大規模化する。2) 市場を通さず木材を低コストで売買する仕組みを作る。

これからの流通の方向性



これからの木材流通の方向性 連携と小さな町の工務店



「顔の見える産業」で地域の自立的発展を ～暮らしを中心にした社会の成立から～

結論

- ・地域内循環をCBや連携で構築
- ・家族、地域(人)を中心に考える
- ・生産、加工、流通を域内で行い、都市部へ
- ・地域の課題は何か、何が困っているのか、それをベースに活動する
- ・地域ファンド、LETS, 中間支援の必要性